

# 札幌初雪—

## 北海道大學愛努・先住民研究中心 冬季研討會

札幌に初雪が降る—北海道大学アイヌ・先住民研究センター 冬季シンポジウム  
Early Snow in Sapporo: A Winter Symposium Held by Center for Ainu and Indigenous Studies, Hokkaido University

文 | 陳文玲 (政治大學民族學系助理教授)

翻譯 | 石村明子 (政治大學民族學系碩士班) 圖 | 編輯部

日本北海道大學愛努先住民研究中心繼2008年6月29日舉辦的「愛努研究的現在與未來：第一部」(參見本刊2008年8月號第22期p.88)之後，於年底12月6日續辦了冬季研討會「愛努研究的現在與未來：第二部」。原住民族研究中心林修澈主任偕民族學系新聘助理教授陳文玲受邀出席參加。會議當天，札幌落雪，積雪近一呎，北海道大學校園如詩如畫。

這次的冬季研討會是分別由文化人類學、法律學與政治學、體質人類學三個學門的學者各發表60分鐘演講，每場各有一位愛努人及相關研究的學者分別回應。最後是綜合討論。主辦單位愛努・先住民研究中心主任常本照樹(TSUNEMOTO Teruki)教授於前一天特別安排中心主



會議當天，札幌落雪，積雪近一呎，北海道大學校園如詩如畫。

任林修澈在第一場文化人類學演講後，發表十五分鐘評論。

文化人類學場的主講者—佐佐木利和(SASAKI Toshikazu)教授，任職於國立

民族學博物館先端人類科學研究部，講題是「文化人類學為何要迴避愛努？」佐佐木以在簡要說明文化人類學的研究對象及觀點之後，引用一位文化



「愛努研究的現在與未來：第二部」研討會實況。

討論的議題從對愛努文化逐漸消失的憂慮，以至研究者與被研究者之間的倫理問題。林修澈提出「採蜜與養蜂」比喻研究者與被研究者關係，引起在場學者們的共鳴。

人類學相關人士的話：「對文化人類學而言，愛努不是研究的對象，愛努的研究結束了。」做為開場。佐佐木先生接著拋出幾個問題：「原本『愛努』的研究存在嗎？」、「人類可以做人類的研究嗎？」、「研究者與被研究者」，表明自己是「學習愛努文化，不是做研究」的立場。

林修澈主任繼兩位講評人之後，提出「採蜜與養蜂」比喻研究者與被研究者關係，引起在場學者們的共鳴，研討會

負責人兼本場次主持人桑山敬己（KUWAYAMA Takami，文化人類學家，北海道大學講座教授）對林主任提出的觀點表示贊同，佐佐木教授也當場向林主任商借這個比喻，以後讓他引用。

下午的兩場演說分別是從法律學及體質人類學的立場來談。北海道大學法學佐佐木雅壽（SASAKI Masatoshi）教授以加拿大憲法為參考，提出日本先住民族權利的研究方法。前日人類學會會長現任北海



「愛努研究的現在與未來：第二部」會議海報。



道文教大學的百百幸雄教授（DODO Yukio）的演說是「愛努與繩文人—日本列島的基層集團」，百百教授將他畢生對考古・體質人類學的研究成果，透過精采的照片圖表，簡明扼要地介紹日本的石器時代不同集團人種的分布序列，從明治時代就已知北海道愛努人的形態類似於繩文人，其間經歷了不同學者的各種不同的假設。今天的北海道的愛努人是以日本列島的繩文人以及北海道的續繩文人為母體而形成的人種，幾乎已經成為定論了。百百教授四十多年的研究生涯專精於一門，從考古・體質的資料中比對出許多證據，對日本的考古體質人類學上有莫大的貢獻，百百教授謙沖的態度

與諷諧的演說，搏得與會者對其人及其學問生起由衷的敬意。

最後一場是綜合討論，由當天的全體發言人列席，與在場者交互問答討論了將近一小時。討論的議題從對愛努文化的逐漸消失的憂慮以至研究者與被研究者之間的倫理問題。在嚴肅地面對原住民族研究倫理問題之後，愛努民族博物館學藝員野本正博先生（NOMOTO Masahiro 愛努人）樂觀地預期今後愛努人的研究者會逐漸地增加，同時，他也提出兩點憂慮：1.愛努人自己所做的研究，該由誰來評價？2.愛努人研究者與報導人之間的關係又將會如何？北海道 Utari協會副理事長阿部Yupo先

生（ABE Yupo 愛努人）感謝支援愛努人的許多國際朋友，讓他們可以得到很大的精神安慰。最後，大家合照結束這場研討會。



政大原住民族研究中心林修澈主任、民族學系陳文玲助理教授與北海道大學愛努・先住民研究中心常本照樹主任合影。



研討會後合影。

## 札幌に初雪が降る—北海道大学アイヌ・先住民研究センター 冬季シンポジウム

北海道大学アイヌ・先住民研究センターでは、2008年6月29日の「アイヌ研究の現在と未来：第一部」（本誌2008年8月第22号p.88参照）に続き、年末の12月6日に冬季シンポジウム「アイヌ研究の現在と未来：第二部」が行われた。原住民研究センターからは林修澈センター長と民族学科の新任助理教授・陳文玲が招待され出席した。シンポジウム当日の札幌は雪で、30cmほど雪が積もった北海道大学のキャンパスはまるで詩や絵のようだった。

今回の冬季シンポジウムは文化人類学、法律学・政治学、形質人類学の三分野の学者による60分間の講演が行われ、各セッションでアイヌおよび関連研究者がそれぞれコメントを述べた。そして最後セッションでは座談会が行われた。またシンポジウムの前日、主催のアイヌ・先住民研究センター長・常本教授の計らいで、第一セッションの文化人類学の講演後、本センター長・林修澈先生による15分のコメントが設けられた。

文化人類学セッションの講演者は、国立民族学博物館先端人類科学研究部の佐々木利和教授で、テーマは「文化人類学は何故アイヌを忌避するか」であった。講演は、文化人類学の対象と研究の視点についての略説に続いて、ある文化人類学に関連する人士から「文化人類学者にとってアイヌ

は研究の対象ではない アイヌの研究は終わった」という言葉の引用から始まり、「そもそも『アイヌ』研究は存在するのか」、「人間は人間を研究することの可否」、「研究される側と研究する側」などの問題が提起され、「アイヌ文化を学んでいるが研究はしていない」という立場であると語られた。

二人のコメンテーターに続き、林修澈センター長は「ハチミツ採りからハチ飼いへ」の比喻を使って研究者と被研究者の関係を述べ、会場にいた学者の共鳴を得た。シンポジウムの責任者でセッションの司会者でもある桑山敬己教授（文化人類学者、北海道大学講座教授）も林センター長の視点に賛同し、最後の座談会では佐々木教授も今後はこの例えを用いたい、と林センター長に対して確認した。

午後の2セッションはそれぞれ法律学と形質人類学で、北海道大学法学研究科の佐々木雅寿教授がカナダ憲法を参考にした日本の先住民族の権利研究方法を提示した。続く元日本人類学会会長、現北海道文教大学在任の百々幸雄教授の演説「アイヌと縄文人—日本列島の基層集団」で、百々教授はライフワークである考古学・形質人類学の研究成果についての貴重な写真や図を用いて、日本の石器時代における異人種集団の分布序列を簡潔に説明した。北海道アイヌの形態と縄文人との類似は明治

時代から既に知られており、現在までの各学者のさまざまな仮説を通じて、目下北海道のアイヌは日本列島の縄文人を母体にして成立したという見解はほぼ定説となっていると述べた。考古学・形質人類学を専門に40年間研究し、それらの資料を比較し多くの根拠を導き、日本の考古学・形質人類学に莫大な貢献をした百々教授は、謙虚かつユーモラスな講演で、その人柄と学問に対する心からの敬意を集めた。

最後の総合質疑では、当日の発表者が全員列席し、出席者も交えて1時間近くの質疑応答が行われた。ディスカッションはアイヌ文化が徐々に消失することに対する憂慮から研究者の倫理問題までに及んだ。厳粛な態度で先住民族研究の倫理問題と向き合った後、アイヌ民族博物館学芸員・野本正博氏（アイヌ）から、今後はアイヌ研究者が増えるだろうという楽観的な意見と共に、1. アイヌ自身による研究は誰から評価されるのか、2. アイヌ自民族研究者とインフォーマントの関係はどうなるのか、という憂慮すべき二点が挙げられた。また、北海道ウタリ協会副理事長・阿部ユボ氏（アイヌ）からはアイヌを応援する海外の友人から精神的に励まされたことに対する感謝の言葉が述べられた。最後に記念撮影をもってシンポジウムは幕を閉じた。

